# 佛教學研究

宮治　昭教授
定年記念

第 70 号

龍谷大學佛教學會

平成 26 年 3 月

宮治　昭教授定年記念

# 佛教學研究

第七〇号

龍谷大學佛教學會

# 巻頭言

宮治昭先生は平成二十五年三月末日を以て六十八歳にて龍谷大学を定年退職されました。先生は名古屋大学の文学部教授でありましたが、龍谷大学とご縁を結んで下さったのは平成十八年四月からで、最初は客員教授としてご就任頂きました。その後、平成十九年四月からは文学部特任教授として三年間御苦労下さいました。それに引き続きまして平成二十二年四月からは文学部の専任教授として研究と学問の指導に当たって下さいました。そればかりか平成二十二年四月から平成二十五年三月までの三年間は新設されました龍谷ミュージアムの初代館長を兼任下さって数々の激務をこなし、今日のミュージアムの基礎を作って下さいました。ですから宮治先生と龍谷ミュージアムは切っても切れない関係にあります。これらにつきましては入澤崇現龍谷ミュージアム館長の「宮治昭教授と龍谷ミュージアム」文に詳細に紹介されていますので今はそれに譲りたいと思います。

その他の面でも、宮治先生が龍谷大学の文学部仏教学科にお越しいただいた事で、私たちが大変に有り難く感じていることがあります。すなわち仏教美術学の面をこの龍谷大学に導入して頂いた事です。皆さんもご承知のように、龍谷大学の仏教学は江戸時代より華厳・天台・倶舎・唯識という四方面の教学を中心として研究がなされて来ました。明治以降に至りますとインド哲学やインド仏教学、それに大谷探検隊将来資料によります西域学など龍谷大学の魅力ある学風を今日まで形成して参りましたが、仏教美術の面まで及ばなかったのが正直なところでした。それが龍谷ミュージアムの開館計画が持ち上がりましてから、大学の執行部が俄然、仏教の美術面に注目し、斯学の第一人者としての宮治昭先生に白羽の矢を立てたのです。

先生の業績を見て頂いても分かりますように、先生は数々の学術賞に輝いておられます。平成四年には「国華特別賞」を、平成十九年には「東海印度学仏教学会学術賞」を、そして平成二十三年には「中日文化賞」を、また平成二十四年には「中村元東方学術賞」を、というように、受賞の数々を見ただけで、今更先生の業績を紹介するまでもないことがよく分かります。特に中村元東方学術賞は、東京大学名誉教授で日本学士院会員の中村元博士が「東洋思想の研究及びその成果の普及」を目的として設立された財団法人東方研究会とインド大使館との共催において、学術・文化活動で優れた業績をあげた学者を顕彰するために創設された学術賞です。ですからインド学や仏教学の中では大変権威ある賞と評されています。

これらを受賞された先生が龍谷大学にお越し下さったのですから、当然ながら仏教美術に関心を示す学部生や、それを専門に研究する大学院生が増加し、新たな龍大の専門分野として定着してきました。これは大変有り難いことだと喜んでおります。先生にご指導頂いた学生達がいずれ龍大の仏教学科の専任教員となって、教学と美術を兼ねた研究を行い仏教学界に新風を巻き起こしてくれることを小生は期待しております。そのような新進気鋭の学者をも含め、ここに八人の方達から投稿頂いた論文を収録して宮治昭先生退職記念号を編集し、先生に献呈させて頂きたいと思います。

先生には今後も龍大の特任教授として後進の指導をお願いすることになっておりますが、とりあえず定年退職を一つの区切りとして今日までの先生の御苦労に報いさせて頂きたいと考えます。宮治昭先生、本当にお疲れ様でした。厚く感謝申し上げます。

平成二十六年二月二十日

龍谷大學佛教學會長
淺田正博

# 特別寄稿　宮治昭教授と龍谷ミュージアム

龍谷大学龍谷ミュージアム館長　入澤　崇

西本願寺の正面に龍谷ミュージアムがオープンした。二〇一一年四月のことである。仏教総合博物館としての特色をもつ龍谷ミュージアムの開設は宮治昭先生なくしてはあり得なかった。

二〇〇六年に仏教美術研究の第一人者である名古屋大学の宮治先生を龍谷大学に客員教授としてお迎えした。私が代表を務める「龍谷大学アフガニスタン仏教遺跡学術研究プロジェクト」を充実させるため、大学の研究政策としてとられた措置である。この時期の宮治先生は実に多忙で、本務校の名古屋大学、そして龍谷大学、さらには静岡県立美術館館長の要職に就かれていた。大学内で龍谷ミュージアム設置に関する議論が本格化してきたのは丁度この頃である。ただし、宮治先生も私も龍谷ミュージアムのことがまともに自分たちにふりかかって来ようとは思ってもみなかった。

二〇〇六年も押し迫って、大学は龍谷ミュージアムの設置を正式決定した。宮治先生と私に協力要請が内々にあったものの、二人ともミュージアムの全体像が捉えきれないでいた。仏教学科の方では、大学院充実のために学科の総意で宮治先生を特任教授として迎える決定がなされた。

二〇〇七年十月、ミュージアム開設準備室が発足した。室長が宮治先生、副室長が私。準備室が発足したとき、私はトルクメニスタンに調査に出向いており、帰国して深草学舎の開設準備室に顔を出して驚いた。私たち二人

以外に、次長、課員一名、嘱託職員一名の三名しかいなかった。ミュージアムの規模は私立大学が開設する博物館としてはトップクラスになる予定だと大学は言いながら、その船出はあまりに寂しいものだった。本格的に準備に乗り出せる体制が整ったのは二〇一〇年四月からである。

当初、建築関係の話はどんどん進行していったが、肝心な中身の話は後回しになっていた。「危うい」と宮治先生も私も感じていた。龍谷ミュージアムを仏教総合博物館とし、インドから日本に至るまでの仏教の歩みが通覧でき、かつ仏教の魅力を伝えることのできるミュージアム。決まっていたのはここまで。そして大学からは「社会に向けて発信力のあるミュージアム」という要望が突きつけられた。これには宮治先生も私も頭を抱えた。龍谷大学が所蔵する仏教関連のものは主に文書が多く、一般来館者に強く訴えるためにはなんとしても仏像を初めとする立体物が必要だった。

ここで、宮治先生が動いたのである。「日本にあるガンダーラ彫刻を収集できないか」と。ガンダーラの彫刻は大英博物館、ギメ美術館、メトロポリタン美術館などに散在しているが、日本にも多くの優品があり、宮治先生が個人コレクターや古美術商に龍谷ミュージアムのコンセプトを伝えて回ったのである。その結果、多くの寄贈品・寄託品を受け入れることができた。所蔵者は宮治先生の高い研究能力と熱意につき動かされたのである。いま龍谷ミュージアムにガンダーラ出土の仏像や仏伝図が所蔵され、平常展では二階展示室にそれらが陳列される。宮治先生の尽力の賜物である。

二〇一〇年四月に宮治先生は仏教学科の専任教員となるとともに、龍谷ミュージアム初代館長に就任し、私が副館長として補佐することになった。開館まで残された時間はあと一年。宮治先生の強いリーダーシップと有能な学芸員のおかげにより、なんとか開館記念展『釈尊と親鸞』の開幕にこぎつけた。親鸞聖人七五〇回大遠忌法要に合わせて開館せよというのが大学からの厳命であった。大宮図書館所蔵品、西本願寺の法宝物のほか、百カ

所以上の寺院・博物館・個人から、テーマに添う作品を借用展示し、一年間六期にわたる充実した展覧会を成し遂げることができた。開館記念図書『釈尊と親鸞』（法蔵館）、冊子図録八冊も刊行することができた。

初年度は特別な年で、ミュージアムの実質上のスタートは二〇一二年度。宮治先生が構想されたのは、毎年春と秋に特別展を行い、春の方はアジアの仏教、秋の特別展は日本の仏教に焦点をあて、平常展は年三回行うというもの。開館記念展が行われている間、次年度の特別展の準備に追われていた。次年度の春の特別展は大谷コレクションを所蔵する中国・旅順博物館からシルクロード文物を運び、「仏教の来た道」をタイトルとする特別展を考えていた。龍谷大学西域研究会が長年にわたり旅順博物館と共同研究をした成果を世に問う試みでもあった。旅順博物館には第一次大谷探検隊がガンダーラで収集した仏像や仏伝図もあった。それらを龍谷ミュージアムで公開する計画をたてたのである。二〇一一年の秋には旅順博物館の郭富純館長（当時）がミュージアムに来られ、春の特別展開催に強い期待を寄せられた。展示の内容も次第に固まっていき、後は中国・国家文物局の許可を待つばかりとなった。

しかし、事態は暗転した。二〇一一年十二月下旬になっても中国側の許可がおりず、旅順博物館所蔵品を中心とした「仏教の来た道」は幻に終わった。当日の私のメモには「呆然自失、頭の中は真っ白」とある。

もう時間がなかった。共催の読売新聞社はすでに「仏教の来た道」の告知を用意していた。準備できる期間は実質三カ月。さて、どうする。宮治先生の力量が如何なく発揮されたのはここからだった。タイトルはそのまま、大谷探検隊の足跡を辿るコンセプトもそのままで、龍谷大学所蔵品を中心にして、国内の博物館から協力を得る作戦に切り替えたのである。宮治先生は動いた。東京国立博物館・京都国立博物館・松岡美術館・東京大学東洋文化研究所・泉屋博古館・藤井斉成会有鄰館・ミホミュージアム・大和文華館などから西域関連文物を借用すべく先生が交渉にあたり、見事に難局を乗り越えることができた。宮治先生によって選ばれた展示品は学術的に評

価が高いものばかりで、この展示は各方面から絶賛された。この年の秋の特別展「〝絵解き〟ってなぁに」も大いに好評を博した。龍谷ミュージアムの基盤を築いたのはまぎれもなく宮治先生である。

宮治先生はミュージアム業務で多忙を極めた二〇〇八年から二〇一三年まで科学研究費・基盤研究（A）「ガンダーラ美術の資料集成とその統合的研究」を遂行され、そして二〇一〇年には『インド仏教美術史論』（中央公論美術出版）の大著を刊行された。ただただ頭が下がる。宮治先生は定年退職後も「図像学」と「仏教学」を架橋する試みに挑戦しつつある。

仏教学を専攻する学生で仏教美術に関心をもつ者は宮治先生の後を追うがいい。必ずや実りある成果がもたらされるであろう。いま龍谷ミュージアムには仏教美術の名品が並ぶ。本物を見て学ぶという理想の環境が出現したのである。どうかミュージアムに何度も足を運び、己の研究課題を探り出してもらいたい。龍谷ミュージアムは探究心の強い学生の来館を待っている。

宮 治　　昭 教授　近影

# 宮治　昭　教授　略歴

生年月日　　昭和二〇年二月七日生

〈学　歴〉

昭和四三年三月　名古屋大学文学部（哲学科美学美術史専攻）卒業
昭和四六年三月　名古屋大学大学院文学研究科修士課程（東洋哲学専攻印度哲学専門）修了
昭和四六年四月　同　博士課程進学
昭和四七年三月　同　博士課程中途退学

〈職歴および研究歴〉

昭和四七年四月～昭和五二年三月　名古屋大学文学部助手（美学美術史研究室）
昭和五二年四月～昭和六〇年三月　弘前大学教養部助教授（芸術担当）
昭和六〇年四月～平成　三年三月　名古屋大学文学部助教授（美学美術史研究室）
平成　三年四月～平成一九年三月　名古屋大学文学部教授（同）（退職時に名誉教授）
平成一八年四月～平成一九年三月　龍谷大学客員教授
平成一八年四月～平成二二年三月　静岡県立美術館館長
平成一九年四月～平成二二年三月　龍谷大学文学部特任教授

平成二二年四月～平成二五年三月　龍谷大学文学部教授
平成二二年四月～平成二五年三月　龍谷大学龍谷ミュージアム館長

〈非常勤講師出講歴〉
東北大学、大阪大学、三重大学、愛知県立芸術大学、同朋大学、中部大学、国際仏教学大学院大学

〈学　位〉
平成三年三月　名古屋大学　文学博士（『涅槃と弥勒の図像学―インドから中央アジアへ―』）

〈所属学会〉
美術史学会、密教図像学会、東海印度学仏教学会、南アジア学会、日本オリエント学会、東方学会、日本印度学仏教学会、日本仏教学会、龍谷仏教学会

〈褒　章〉
平成　四年　国華特別賞
平成一九年　東海印度学仏教学会学術賞
平成二三年　中日文化賞
平成二四年　中村元東方学術賞

〈社会的活動〉

1. 愛知県文化財保護審議会委員（平成二年四月～平成一六年三月）
2. 愛知県史編纂専門委員会委員（平成六年六月～平成一八年四月、同文化財部会長　平成一八年六月～平成二四年五月）
3. 文部省学術審議会専門委員（平成七年一月～平成九年一月）
4. 日本学術会議東洋学研究連絡委員会委員（平成九年一〇月～平成一二年一〇月）
5. シルクロード学研究センター企画運営委員（平成六年四月～平成二〇年三月）
6. 文化遺産国際協力コンソーシアム　東アジア・中央アジア分科会委員（平成一九年六月～現在に至る）
7. 文化庁文化審議会専門委員（文化財部会）（平成二〇年二月～平成二一年三月）
8. 東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター運営委員会委員（平成二二年四月～現在に至る）

# 宮治昭博士　主要業績目録

A　著書

1. 『インド美術史』吉川弘文館、一九八一年、第五刷：一九九七年、二三九頁
2. 金香淑・高延銀訳、韓国語版『インド美術史』Dahal Media 出版（ソウル）、二〇〇六年、三六六頁
（増補復刊）歴史文化セレクション『インド美術史』吉川弘文館、二〇〇九年、二四八頁
3. 『アジャンター窟院』（世界の聖域7、序文・総論：柳　宗玄）講談社、一九八一年、一五一頁
4. 『ガンダーラ』（写真　並河萬里）本文解説担当、岩波書店、一九八四年、一二八頁
5. 『正倉院』（日本の古寺美術　別巻）保育社、一九八六年、二三〇頁
『涅槃と弥勒の図像学―インドから中央アジアへ―』吉川弘文館、一九九二年、六九二頁
李萍・張清濤訳『涅槃与弥勒的図像学―从印度到中並』敦煌研究院（仏教芸術与敦煌学名著訳叢）北京・文物出版社、二〇〇九年、六〇八頁
6. 『ガンダーラ　仏の不思議』講談社選書メチエ、一九九六年、三二六頁
李萍訳『犍陀羅美術尋跡』中国北京・人民美術出版社、二〇〇六年
7. 『仏教美術のイコノロジー―インドから日本まで―』吉川弘文館、一九九九年、二七〇頁
8. 『バーミヤーン、遥かなり―失われた仏教美術の世界』NHKブックス、二〇〇二年、二七三頁
9. 『仏像学入門―ほとけたちのルーツを探る―』春秋社、二〇〇四年、三三八頁
（増補版）春秋社、二〇〇四年、三七六頁
10. 賀小萍訳『吐峪沟石窟壁画与禅観』上海古籍出版社、二〇〇九年、二一二頁

11. 『インド仏教美術史論』中央公論美術出版、二〇一〇年、七〇一頁
12. *Collected Essays on the Art of Gandhāra and Bāmiyān*, Ryūkoku University, 2012, 二六〇頁

B 編著・共著

1. 宮治昭・モタメディ遥子編『シルクロード博物館』（「ガンダーラの仏伝美術」「仏像の道―インドより中国へ―」執筆）講談社、一九七九年
2. 樋口隆康編『バーミヤーン』（京都大学中央アジア学術報告）I・II図版篇、III・IV本文篇、「壁画」（記述）および「壁画および塑像の装飾美術に関する比較考察」（研究）を執筆、同朋舎、一九八三～八四年（再版）同朋舎メディアプラン、二〇〇一年
3. 宮治昭編『インド・パキスタンの仏教図像調査』（「ガンダーラ三尊形式の両脇侍菩薩について」執筆）、昭和五八～五九年度科学研究費補助金研究成果報告書、弘前大学、一九八五年
4. 山田耕二・宮治昭『東寺』（日本の古寺美術　一二巻）保育社、一九八八年
5. 宮治昭編『インドのパーラ朝美術の図像的学研究』（「インドのパーラ朝の仏陀像の図像学的研究」執筆）、平成三～四年度科学研究費補助金研究成果報告書、名古屋大学、一九九三年
6. 宮治昭編『仏伝美術の伝播と変容―シルクロードに沿って―』（「仏伝美術の伝播と受容」「ガンダーラの仏伝美術」執筆）シルクロード学研究 vol. 3、シルクロード学研究センター、一九九七年
7. 宮治昭編『宗教的実践の視点による仏教美術とキリスト教美術の比較研究』（「仏教における実践と美術―礼拝・供養と瞑想・観想を中心に―」執筆）、平成九～一〇年度科学研究費補助金研究成果報告書、名古屋大学、一九九九年

8. 肥塚隆・宮治昭編『世界美術大全集　東洋編14　インド（2）』（「中世前期の北インド―仏教美術の発展と変貌」執筆）小学館、一九九九年

9. 肥塚隆・宮治昭編『世界美術大全集　東洋編13　インド（1）』（「豊饒と寂静のインド古代美術」「マトゥラーの古代美術」「南インドの古代美術」執筆）小学館、二〇〇〇年

10. 宮治昭・NHK「キジル」プロジェクト編『シルクロード　キジル大紀行』（「キジル石窟の美術―石窟構造と壁画―」執筆）日本放送出版協会、二〇〇〇年

11. 宮治昭編『観音菩薩像の成立と展開―変化観音を中心にインドから日本まで―』（「観音菩薩の成立と展開―インドを中心に―」執筆）シルクロード学研究 vol. 11、シルクロード学研究センター、二〇〇一年

12. 宮治昭編『インドから中国への仏教美術の伝播と変容に関する研究』（「調査・研究の概要」「スワート」「タキシラ」「インドの観音菩薩像の展開と変化観音」「密教五仏」執筆）、平成一〇～一二年度科学研究費補助金研究成果報告書、名古屋大学、二〇〇一年

13. 宮治昭編『宗教美術における視覚的イメージの機能と使用方法：仏教とキリスト教美術の比較研究』（「観法と観経変―観経変の成立をめぐって―」執筆）、平成一二～一三年度科学研究費補助金研究成果報告書、名古屋大学、二〇〇二年

14. 宮治昭編『古代インドにおける宗教的造形の諸相―寺院建築と美術の成立と展開―』2vols、平成一四～一七年度科学研究費補助金研究成果報告書、名古屋大学、二〇〇六年

15. 宮治昭編『交流と伝統の視点から見た仏教美術の研究―インドから日本まで―』（「インド・ガンダーラにおける仏伝図の生成」執筆）、平成一六～一九年度科学研究費補助金研究成果報告書、龍谷大学、二〇〇八年

16. 宮治昭編『ガンダーラ美術の資料集成とその統合的研究』（「ガンダーラ美術と大乗仏教―特に仏三尊像と大

神変図を中心に—」「ガンダーラ美術研究の現状」執筆)、平成二〇~二四年度(予定)科学研究費補助金研究成果中間報告書、龍谷大学、二〇一一年

17. 宮治昭編『ガンダーラ美術の資料集成とその統合的研究』(「ガンダーラ美術研究の現状」「ガンダーラの仏教美術—仏伝・禅観・大乗仏教との関わり—」執筆)平成二〇~二四年度科学研究費補助金研究成果報告書、2vols、龍谷大学、二〇一三年

18. 宮治昭編『ガンダーラ・クチャの仏教と美術—シルクロードの仏教文化、第I部』Buddhism and Art in Gandhāra and Kucha(『ガンダーラ美術の資料集成とその統合的研究』国際シンポジウム)、平成二〇~二四年度科学研究費補助金研究成果報告書、龍谷大学、二〇一三年

C 翻訳

1. エリアーデ著『悪魔と両性具有』(堀一郎監修、エリアーデ著作集第六巻)せりか書房、一九七三年
2. 「Divyāvadāna 第12章 "prātihārya-sūtra" 和訳」『弘前大学教養部文化紀要』第一三号、一九七九年
3. ヴィディヤ・デヘージア著、宮治昭・平岡三保子訳『インド美術』岩波書店、二〇〇二年

D 学術論文

1. 「舎衛城の神変」『東海仏教』第一六輯、一九七一年
2. 「バーミヤーンF洞の涅槃図」『名古屋大学文学部研究論集』LX、一九七三年
3. 「バーミヤーン西大仏(五十五米仏)の仏龕壁画」『國華』九九二号、一九七六年
4. "The Art of Bamiyan", *Bamiyan—Crossroads of Culture—*, Asian Cultural Center for UNESCO, Tokyo,

1976
5. "Wall Paintings of Bamiyan: a stylistic analysis", *Japan-Afghanistan Joint Archaeological Survey in 1974*, (ed.) T. Higuchi, Kyoto University, 1976
6. 「バーミヤーン壁画の展開（上）」『佛教藝術』一一三号、一九七七年
7. 「バーミヤーン壁画の展開（下）」『佛教藝術』一一八号、一九七八年
8. "The parinirvāna scenes of Bāmiyān: an iconographical analysis", *Japan-Afghanistan Joint Archaeological Survey in 1976*, (ed.) T. Higuchi, Kyoto University, 1978
9. 「ストゥーパの意味と涅槃の図像—仏教美術の起源に関連して—」『佛教藝術』一二二号、一九七九年
10. 「インド彫刻史におけるグプタ様式の生成—マトゥラー彫刻を中心に—」『佛教藝術』一三〇号、一九八〇年
11. "Wall Paintings of Bamiyan: a stylistic analysis (II)", *Japan-Afghanistan Joint Archaeological Survey in 1978*, (ed.) T. Higuchi, Kyoto University, 1980
12. 「バーミヤーンの〝飾られた仏陀〟の系譜とその年代」『佛教藝術』一三七号、一九八一年
13. 「キジル石窟における涅槃の図像構成」『オリエント』第二五巻第一号、一九八二年
14. 「中央アジア涅槃図の図像学的考察—哀悼の身振りと摩耶夫人の出現をめぐって—」『佛教藝術』一四七号、一九八三年
15. 「バーミヤーンの塑像唐草紋」『展望アジアの考古学—樋口隆康教授退官記念論集』所収、新潮社、一九八三年
16. 「中央アジアの涅槃図像—バーミヤーンとキジルを中心に—」『応徳仏涅槃図の研究と保存』所収、東京美術、一九八三年

17. 「古代インドにおけるスーリヤの図像について」『佛教藝術』一五六号、一九八四年
18. 「敦煌美術とガンダーラ・インドの美術—初期敦煌美術における西方影響の二・三の問題」『東洋学術研究』第二四巻第一号、一九八五年
19. 「ガンダーラにおける半跏思惟の図像—半跏思惟像の出現—」田村圓澄・黄壽永編『半跏思惟像の研究』所収、吉川弘文館、一九八五年
20. "Iconography of two flanking Bodhisattvas in Gandharan buddhist triads", *Iconographical Study of Buddhist art in India and Pakistan*, (ed.) A. Miyaji, Hirosaki University, 1985
21. 「インドにおける弥勒図像の変遷」町田甲一先生古稀記念刊行会編『論叢仏教美史』所収、吉川弘文館、一九八六年
22. 「インド仏伝図像の研究（一）—『兜率天上の菩薩』『白象降下』—」『名古屋大学文学部研究論集』XCIX、一九八七年
23. 「託胎霊夢—インド仏伝図像の研究（二）—」『名古屋大学文学部研究論集』CII、一九八八年
24. 「南インド・アマラーヴァティーの涅槃説話図」『美学美術史研究論集』第六号、名古屋大学文学部美学美術史研究室、一九八八年
25. 「キジル石窟—石窟構造・壁画様式・図像構成の関連—」『佛教藝術』一七九号、一九八八年
26. 「キジル第一様式のヴォールト天井窟壁画（上）—禅定僧・山岳構図・弥勒の図像構成—」『佛教藝術』一八〇号、一九八八年
27. 「キジル第一様式のヴォールト天井窟壁画（下）—禅定僧・山岳構図・弥勒の図像構成—」『佛教藝術』一八三号、一九八八年

28. 「ガンダーラ涅槃図の読解」『名古屋大学文学部研究論集』一〇五号、一九八九年
29. 「弥勒と大仏」『オリエント』第三一巻第二号、一九八九年
30. 「キジル石窟の涅槃図像」『美学美術史研究論集』第七号、名古屋大学文学部美学研究室、一九八九年
31. 「古代インドのブラフマー（梵天）とインドラ（帝釈天）の図像について―〝聖者的・行者的イメージ〟と〝王者的・戦士的イメージ〟―」『環太平洋圏における文化的・社会的構造に関する研究』所収、名古屋大学環太平洋問題研究会、一九九〇年
32. 「ガンダーラの弥勒菩薩の図像について」『名古屋大学文学部研究論集』一〇八号、一九九〇年
33. 「バーミヤーン石窟の天井壁画の図像構成―弥勒菩薩・千仏・飾られた仏陀・涅槃―」『佛教藝術』一九一号、一九九〇年
34. 「インドにおける涅槃美術の変遷」『美学美術史研究論集』第八号、名古屋大学文学部美学美術史研究室、一九九〇年
35. 「ストゥーパのシンボリズムとその装飾原理」『南都仏教』第六四号、一九九〇年
36. 「西域の仏教美術―インド仏教美術の受容と変容―」鎌田茂雄編『仏教の受容と変容4 中国編』所収、佼成出版社、一九九一年
37. 「宇宙主としての釈迦仏―インドから中央アジア・中国へ―」立川武蔵編『曼荼羅と輪廻』所収、佼成出版社、一九九三年
38. 「インドの地天の図像とその周辺」『宮坂宥勝博士古稀記念論文集（上）インド学仏教学研究』所収、法蔵館、一九九三年
39. 「インド古代初期美術の〝降魔成道〟の諸相」『名古屋大学文学部研究論集』一二〇号、一九九四年

40. 「インド仏伝美術の三類型」『佛教藝術』二一七号、一九九四年
41. 「トゥルファン・トヨク石窟の禅観窟壁画について—浄土図・浄土観想図・不浄土観想図（上）—」『佛教藝術』二二一号、一九九五年
42. 「トゥルファン・トヨク石窟の禅観窟壁画について—浄土図・浄土観想図・不浄土観想図（中）—」『佛教藝術』二二三号、一九九五年
43. 「インドの大日如来像の現存作例について」『密教図像』一四号、一九九五年
44. 「トゥルファン・トヨク石窟の禅観窟壁画について—浄土図・浄土観想図・不浄土観想図（下）—」『佛教藝術』二二六号、一九九六年
45. 「蓮のイコノロジー」立川武蔵編『マンダラ宇宙論』所収、法蔵館、一九九六年
46. 「スワートの諸難救済を表す八臂観音菩薩坐像浮彫について」『国華』一二二一号、一九九七年
47. 「仏教の起源に関する近年の研究状況について」『大和文華』九八号、一九九七年
48. 「瞑想・観想とガンダーラ・中央アジアの仏教美術—観経変の成立前史—」『国文学』四四巻八号、一九九九年
49. "A Bas-Relief of Eight-Armed Avalokiteśvara as Saviour of Men, probably from Swāt, Pakistan", *South Asian Archaeology 1997*, Vol. III, 2000
50. 「インドの観音像の展開—密教系観音・変化観音の成立を中心に—」『佛教藝術』二六二号、二〇〇二年
51. 「観経変の成立をめぐって—トヨク石窟・小南海石窟・敦煌初唐窟—」『日本仏教学会年報』六七号、二〇〇二年
52. 「「舎衛城の神変」と大乗仏教美術の起源」『美学美術史研究論集』二〇号、名古屋大学大学院文学研究科美

学美術史研究室、二〇〇三年
53. 「アジア的視点から見た大仏の造立」『論集 東大寺の歴史と教学』（ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集）第一号、法蔵館、二〇〇三年
54. "The Buddhist Art of Bamiyan", *The Culture of Afghanistan: International Cultural Exchange and Buddhist Culture*, International Cultural Exchange Symposium 2002, Final Report, International Cultural Exchange Symposium 2002 Committee, 2003
55. "The Iconographic Program of the Murals in the Ceiling of Bamiyan Caves—Bodhisattva Maitreya, Thousand Buddhas, Be jeweled Buddha and the Scene of Parinirvāna—", *Journal of Studies for the Integrated Text Science*, vol. 1, no. 1, Graduate School for Letters, Nagoya University, 2003
56. 「チャイティヤと仏教信仰の習合—聖樹・聖柱・舎利・仏塔・聖地・表象—」頼富本宏編『聖なるものの形と場』所収、法蔵館、二〇〇四年
57. "The Idea and Realization of the Colossal Buddhas: Maitreya and Vairocana", *Three Mountains and Seven Rivers—Prof. Musashi Tachikawa's Felicitation Volume*—ed. by S. Hino and T. Wada, Motilal Banarasidass Publishers, Delhi, 2004
58. 「半跏思惟像の生成—イメージ・テクスト・宗教実践—」木俣元一編『宗教美術におけるイメージとテクスト』所収、「統合テクスト科学の構築」第五回国際研究集会報告書、名古屋大学大学院文学研究科、二〇〇五年
59. 「ガンダーラにおける最初期の仏像について」『真鍋俊照博士還暦記念論文集 仏教美術と歴史文化』所収、法蔵館、二〇〇五年

60. 「南インドの転輪聖王の図像—マンダータル王説話図を中心に—」『頼富本宏博士還暦記念論文集　マンダラの諸相と文化（下）』所収、法蔵館、二〇〇五年
61. "Maitreya and the Colossal Buddha Images", *Journal of Studies for the Integrated Text Science*, vol. 2, no. 1, Graduate School of Letters Nagoya University, 2005
62. "On the Genesis of Contemplative Bodhisattva: Image, Text and Religious Practice", *Proceedings of the Fifth International Conference Studies for the Integrated Text Science*, Image et texte dans l'art religieux, ed. by M. Kimata, Graduate School of Letters, Nagoya University, 2005
63. 「バーミヤーンの美術史研究と放射性炭素年代」『アフガニスタン文化遺産調査資料集　第2巻（バーミヤーン仏教壁画の編年）』所収、明石書店、二〇〇六年
64. 「ほとけたちの誕生—異宗教（カミ）の受容と展開—」『論集　カミとほとけ—宗教文化とその歴史的基盤』（ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集）第三号、法蔵館、二〇〇五年
65. 「ガンダーラ美術と大乗仏教」『佛教学セミナー』第八一号、大谷大学、二〇〇五年
66. 「ガンダーラ美術—〝火を発する仏陀〟と説話表現」『芸術学フォーラム　4東洋の美術』所収、勁草書房、二〇〇六年
67. 「ガンダーラ・マトゥラーの美術と大乗仏教の関わり」『印度哲学仏教学』第二一号、北海道印度哲学仏教学会、二〇〇六年
68. "The Historical Transition of the Iconography of Bodhisattva Maitreya: The Iconographic Relationship between Maitreya and Avalokiteśvara", *Journal of Studies for the Integrated text Science*, vol. 3, no. 1, Graduate School of Letters, Nagoya University, 2006

69. "Art-historical Study on Bāmiyān and the Radiocarbon Dating", *Radiocarbon Dating of the Bamiyan Mural Paintings. (Recent Cultural Heritage Issues in Afghanistan vol. 2)*, Akashi Shoten, Tokyo, 2006

70. "The Genesis of Buddhist Image : System of the Integration with other Religions into Buddhism", *Journal of Studies for the Integrated Text Science*, vol. 4, no. 1, Graduate School of Letters, Nagoya University, 2006

71. "The Buddhist Sculptures in the Museums of Iran", *Report of the Iran-Japan Joint Research on the Diffusion of Buddhism in Iran 2005*, Archaeological Institute of Kashihara, Nara, 2006

72. 「インドから見たシルクロードの壁画」東京文化財研究所編『シルクロードの壁画 東西文化交流を探る』所収、言叢社、二〇〇七年

73. 「大仏の出現—ダレルとバーミヤーン大仏を中心に—」『佛教藝術』二九五号、二〇〇七年

74. 「対極と類似と差異から読み解く図像学—仏教美術の研究を振り返って—」宮治昭先生献呈論文集編集委員会編『汎アジアの仏教美術』所収、中央公論美術出版、二〇〇七年

75. "Indian Influence on Mural Paintings along the Silk Road", *Mural Paintings along the Silk Road: Cultural Exchange between East and West*, Archetype publications, London, 2007

76. 「バーミヤーンの仏教美術研究—年代論を中心に、研究史と現状—」『龍谷史壇』一二八号、二〇〇八年

77. "Aspects of the Earliest Buddha Images in Gandhara", *Miscellanies about the Buddha Image*, edited by C. Bautze-Picron, South Asian Archaeology 2007, Special Sessions 1, Oxford, 2008

78. "Iconography of the Two Flanking Bodhisattvas in the Buddhist Triads from Gandhara Bodhisattva Siddhārtha, Maitreya and Avalokitevara", *East and West*, vol. 58, nos. 1-4, 2008

79. 「燃燈仏授記図浮彫り」『國華』一三六三号、二〇〇九年

80. 「中央アジアの仏教美術」奈良康明・石井公成編『新アジア仏教史05 中央アジア 文明・文化の交差点』所収、佼成出版社、二〇一〇年

81. 「ガンダーラ美術研究の現状」『國華』一三八五号、二〇一一年

82. 「バーミヤーンの涅槃図—ガンダーラ美術の中央アジア的変容—」『龍谷大学論集』第四七八号、二〇一一年

83. 「西域の仏教美術—涅槃の美術を中心に—」能仁正顕編『龍谷大学仏教学叢書② 西域—流沙に響く仏教の調べ—』所収、自照社出版、二〇一一年

84. "Le schéma iconographique des peintures murals des plafonds des grottes de Bāmiyān", Guillaume Ducoeur ed., *Autour de Bāmiyān: De la Bactriane hellénisée à l'Inde bouddhique*, Paris, 2012

# 目次

巻頭言……淺田正博……一

特別寄稿 宮治昭教授と龍谷ミュージアム……入澤崇……三

宮治昭教授近影

宮治昭教授略歴

宮治昭教授研究業績

三宝荒神像の種々相 序説……石川知彦……一

大谷探検隊の一側面——南洋諸島を調査した龍江義信の事績を中心として——……和田秀寿……三七

新出資料『南山北義見聞私記』発見の意義——南宋律院請来の威儀・法式・法会次第の受容と泉涌寺流の展開——……西谷功……七三

新刊紹介(書評)『ラサ憧憬 青木文教とチベット』高本康子著(芙蓉書房出版、二〇一三年一〇月二三日刊)……三谷真澄……一〇九

平成二十四年度龍谷仏教学会学術研究発表会 発表要旨……一一九

平成二十五年度　文学部卒業論文題目一覧……二二五
平成二十五年度　大学院修士論文題目一覧……二二九
平成二十五年度　龍谷大學佛教學會彙報……二三〇
執筆者紹介……二三一
編集後記

平成二十四年度龍谷仏教学会学術研究発表会　発表要旨……(137)
ガンダーラの浮彫にみられる「擲象」図と仏伝文献……上枝いづみ……(103)
バーミヤーン地域におけるスキンチの導入……岩井俊平……(79)
舎利弗の外道調伏譚に関する試論……岡本健資……(55)
アジャンター石窟寺院における小規模寄進について――寄進銘と大乗仏教――……福山泰子……(27)
ドイツトルファン隊収集の初期無量寿経写本……三谷真澄……(1)

# 世親の唯心論

那須円照

『倶舎論』「根品」四相の考察と、「業品」刹那滅の考察は、『唯識二十論』における、無限分割の理論に適用できる。あるものを空間的に無限分割する場合、そのものに徹底的刹那滅論を適用すれば、無限分割の時間的過程における、住と老の否定からは、前瞬間と後瞬間のものが全く異なることとなり、同じものを分析していることになりえない。また、さらに徹底された、生と滅の否定からは、その分析対象が、時間を超越してしまうことになる。よって、空間的分析を待たずに、時間をものは超越することになり、それに伴い、四次元を超越したものは、その下位概念である三次元を必然的に超越し、時間・空間を、すべての存在は理論的に真実に超越していることが確信できる。よって、その時間・空間を超越したものは心と名づけられ、あるように見える現象の迷いの世界の根拠となる時間・空間を超越した不可思議な心のみが存在し、唯心論が確立される。世親は、図らずもそのようなことを十分意識していたと予想される。ここで以上の世親の唯心論がどのように浄土真宗の現生正定聚・往生即成仏の学説に適用されるのかを考察する。ここで私が、現生正定聚と考える状態は次のような状態である。有為無為を超えた世界としての時間・空間を超えた唯心論の世界は、この世にいるわれわれには、現実には体得できないことは事実である。われわれはこの世では時間・空間の制約という構想からは逃れられない。し

かし、以上の考察をたどることにより、真実の世界は、時間・空間を超えた仏の不可思議な世界であるということを理解し信ずることはできるのである。そして、当来に死後、往生即成仏したときに初めて、時間・空間を超えた世界を体得することができるのである。そして、この現象世界は論理的に無から生じるものではないから、時間・空間を超えた不可思議な世界があらゆる現象の内的必然的根拠となると理解できる。彼土と此土とは不一不異の関係であると考えられるが、それらは二分法的な連続と断絶の併存とは考えられず、相互に溶けあい浸透しあっている関係であると考えられる。

（龍谷大学仏教文化研究所客員研究員）

# 『勝鬘経疏義私鈔』と天台教義との一致

吉田慈順

唐の明空（生没年未詳）撰『勝鬘経疏義私鈔』は、聖徳太子の御製と伝えられる『勝鬘経義疏』の註釈書である。智証大師円珍（八一四～八九一）の伝えるところによれば、本書の撰述者明空は、中国天台の第六祖妙楽大師湛然（七一一～七八二）の門人であったという。しかしながら、このことについては、島地大等氏と中里貞隆氏とがそれぞれ異なった見解を示されており、未だ明確な回答が出されていない。

島地氏と中里氏の見解の相違は、①『勝鬘経疏義私鈔』における天台教義からの影響の有無、②明空が湛然の門人であるか否か、の二点に集約されるものであり、島地氏は、『勝鬘経疏義私鈔』中には天台の法義が使用されておらず、明空を湛然の門人と認めることはできない、という見解を示されている。ところが中里氏は、『勝鬘経疏義私鈔』中に天台の法義が用いられていることを指摘し、湛然門下であるか否かは明らかでないものの、明空が天台に属する人師であったことは間違いないと主張されるのである。

さて、本発表では、この両氏の見解について改めて検討を行ったわけであるが、『勝鬘経疏義私鈔』を精読したところ、本書には『法界次第初門』をはじめ、天台の典籍が広く引用されていることが明らかとなった。そのため、①『勝鬘経疏義私鈔』における天台教義からの影響の有無という問題については、『勝鬘経疏義私鈔』中

には天台の法義が用いられているとする中里氏の見解に従うべきであろう。

次に、②明空が湛然の門人であるか否かという問題であるが、今回の検討によって、『勝鬘経疏義私鈔』中には、湛然再治の『維摩経略疏』、また湛然撰『止観輔行伝弘決』からの引用の見られることが明らかとなった。無論、このことをもって直ちに明空を湛然門下と断ずることはできないが、少なくとも、明空が湛然の著作に通暁した人師であったこと、両者の関係性が極めて近しいものであったことは間違いのないものといえよう。

以上、本発表によって『勝鬘経疏義私鈔』が天台と深く関連する典籍であることが明らかとなった。後世、天台の諸師が本書をどのように受容してきたかについては、今後の課題としたい。

（龍谷大学大学院博士後期課程三回生）

# 〈阿弥陀経〉の成立時期について

## ――阿弥陀仏の寿命を手掛かりとして――

壬生泰紀

〈阿弥陀経〉は、阿弥陀仏の国土やそこへの往生、かの仏への諸仏による讃歎などが説示され、〈無量寿経〉と共に、インドの阿弥陀仏信仰の様相を我々に伝える重要なテキストの一つである。本経典の成立時期に関する研究成果は数多く公表されているが、諸学者の見解が分かれ、いまだ定説化にいたっていないのが現状である。それら先行研究の成果を大別すると、①〈無量寿経〉よりも遅れて〈阿弥陀経〉が成立した、②〈無量寿経〉に先行して〈阿弥陀経〉が成立した、③両経典はほぼ同時期に成立した、との三説となる。つまり、本経典の成立時期を論じる場合、〈無量寿経〉諸異本の展開史上、〈阿弥陀経〉がどこに位置づけられるかがこの問題の焦点の一つであるといえる。

そこで、発表では、阿弥陀仏の特徴の一つである「寿命」に着目し、〈阿弥陀経〉と〈無量寿経〉所説の「阿弥陀仏の寿命」に関する記述、具体的には、「寿命が限りないこと」、「仏と成って十劫が経つこと」、「阿弥陀仏の名前の由来」という記述の内容および説示される位置を比較することによって、〈阿弥陀経〉の成立時期の推定を試みた。

その結果、以下のことが明らかとなった。〈無量寿経〉では、「阿弥陀仏の寿命」に関する記述の内容および説示される位置に、諸異本中で異同が見られる。すなわち、最古訳の『大阿弥陀経』(T. 12, No. 362) において、阿弥陀仏の特徴的な性格はもっぱら「光明」であり、加えて、「阿弥陀仏の寿命」に関する記述は「光明」に関する記述との関連性が乏しい。しかし、それが、時代が下るにつれて次第に阿弥陀仏の特徴として「光明」と対をなすものへと整理され、新たな記述が付加されるにいたったと見られる。一方、〈阿弥陀経〉では、諸異本所説の「阿弥陀仏の寿命」に関する記述は概ね一致している。そして、その内容および説示される位置は、後期成立の〈無量寿経〉諸異本所説のものとの類似点が多い。以上の点を鑑みると、〈阿弥陀経〉は、〈無量寿経〉の成立よりも遅く、おそらく『無量寿経』(T. 12, No. 360) の原本と同時期に成立したものと推定される。

(龍谷大学大学院博士後期課程二回生)

# 平成二十五年度　文学部卒業論文題目一覧

巡礼の研究　泉　稲美
非時食戒は守れるか
——パーリ律を中心に——　鎌田　浩平
阿羅漢の最期　亀山　光暁
仏教建築の研究　木村あゆみ
『往生要集』における源信の思想　小石　裕樹
法然の念仏思想の研究
——特に『選択本願念仏集』を中心として——　田上　純輝
曇鸞の浄土教思想の研究　武田　証道
修験道の研究
——富士山信仰を中心として——　田中　佑昌
融通念仏宗における思想の変化
——良忍と法明と大通を通して——　寺川　良信
燃燈仏授記と大乗仏教思想　古川　史佳
「典座教訓」の一考察　山田　真穂
日本における観音信仰の研究　松岡　末子
クマリ信仰について　丸隈　晃淳
龍樹の時間論　天野　法人
日本における弥勒信仰　有村　葉月

現代仏教における女性仏教徒の可能性
十王図の研究
——敦煌と日本との比較を通して——　生田　熙子
念仏思想の研究
——特に善導・法然を中心として——　泉野由紀恵
不可触民解放運動とアンベードカル　稲荷　順教
中観思想とことば　茨木　拓哉
仏教説話の研究　伊吹奈緒美
法然上人の研究　今西　雄哉
ヤマの研究
——ヤマの観念の成立とその変容を追う——　植田　賢治
仏教における女性観　内海　麻紀
現代日本における仏教観とその背景　宇根岡由紀
仏教における死後の世界観　楳溪　樂眞
一遍の念仏思想の研究　梅原佑加子
仏教と葬送儀礼
——現代社会における死生観と葬儀を中心に——　梅本　慈
小乗涅槃経における迦葉接足について　江夏広太郎
——仏足信仰との関係性——　大窪かをり

芥川龍之介と仏教　大河内隆樹
三宝絵における本生譚の研究　近江　成子
地蔵信仰の一考察
——庶民の信仰と地蔵三部経の対比を通して——　大八木恭太
世記経の六道輪廻説　岡本　俊樹
秘事法門の研究　小澤　史郎
原始仏教における「悪」　香川　昇平
『盂蘭盆経』の研究　北村　優実
釈尊の誕生　木田　圭亮
半跏思惟像の研究　葛原　裕輝
不動明王の研究　國井　稔彦
仏教における業思想の研究　窪　雄大
法然の念仏思想の考察
——『黒谷上人語灯録』を中心とした考察——　熊谷　明彦
平安時代叡山浄土教における臨終念仏の考察　隈元　顕昭
日蓮教学の研究　久米　雅洋
『往生要集』の研究　倉田　慧斗
バガヴァット・ギーターの研究　黒田　成一
平家物語と仏教　近藤ゆかり
阿蘭若の研究　櫻井　侃
大乗仏教の菩薩観　佐々木智佳子
『マハーヴァストゥ』の研究　左藤　仁宏
——「アヴァローキタ・スートラ」を中心として——
ジャータカ図の研究　三歩一浩章

薬師如来の研究　篠原　涼太
中論における二諦説の研究　島田果菜子
ダンマパダの研究　島田　啓史
地獄の研究　清水　大輔
——往生要集を中心に——
『廻諍論』の研究　清水　仁
阿修羅の研究　清水正奈美
——経典と図像の比較を通して——
「従三十三天降下」の説話と図象　清水　亮平
源信の念仏思想について　白石　恵
密教における弥勒菩薩の信仰と美術　白木　好
栄西禅における密教的性格の考察　砂川　享兵
如来蔵思想における一考察　高浦　悠希
——『不増不減経』を中心に——
上田秋成の仏教観　高木　春美
栄西の禅思想の研究　高島　浩史
——特に『興禅護国論』を中心として——
仏教説話の変容　田口　椋
道元禅師における身心一如の思想考察　竹村　亜樹
日蓮教学の展開論　田島加奈子
道元禅の研究　手嶋　真希
阿弥陀仏信仰と仏教美術　出井　雄也
——浄土曼荼羅を中心に——
弥勒浄土教の研究　藤堂　尚紀

伝教大師最澄の研究
——特に一三権実論争を中心として——　渡川　菜摘
仏教における時間論の研究　徳力　義隆
十不善業道の研究　中嶋　崇人
『華厳五教章』の研究
——天台「五時八教判」との比較を通して——　中谷　周二
叡山浄土教の展開について
——『往生要集』を中心として——　長崎　康平
鳩摩羅什の研究　西村　祥吾
ウパニシャッドの輪廻観
——五火二道説を中心に——　橋本　一道
阿難の研究
——特に大迦葉との関係を中心として——　林　美希
比叡山における天台行法の研究　馬場　充子
日本における仏教寺院とその医療活動　日笠　匡規
行基の慈善活動に見る仏教思想について
——福田思想を中心として——　東川　優也
法然の念仏思想の研究　久末　大地
玄奘三蔵の研究
——彼を偉業に導いたもの
その行動に対する思考考察を中心に——　平川　広祐
仏教における葬送儀礼の研究　平田　知洸
日本における曼荼羅　平野　琢真
仏教と異宗教　廣川桐栄子
——クシャーン・コインを手掛かりとして——　福岡　茜
日本における観音信仰と巡礼　藤原健太郎
毘沙門天の研究　古田　照万
日本における仏教建築の研究　古野　瑞揮
仏教と怪談　増山　尭
阿弥陀浄土教の研究
——唯除五逆誹謗正法について——　松田　昂己
日本における四天王信仰の研究　水池　勇太
仏教の説く輪廻とその目的　宮崎　聖奈
不浄観の研究　村田　捺美
東寺講堂の立体曼荼羅に関する考察
——空海の思想を通して——　森　日南
善導浄土教の研究　森田　崇弘
『正法眼蔵』「現成公案」巻の検討
——『正法眼蔵抄』を中心にして——　安田　亮平
道元における時間論の研究　山口　真司
アショーカ王の研究　山田　章博
仏教守護神の研究
——八部衆を中心として——　山田　佑希
初期仏教における縁起説の研究
——十二縁起説を中心に——　吉村　知恭
法然浄土教の研究
——高弁の思想と比較して——　若林謙太郎
禅思想の研究

——盤珪禅師を中心に——　和久津倭紀子
仏教から学ぶ死　度會　紀彦
神仏習合の研究　和田　優紀
空海と華厳教学について　大仁孝太郎
ブッダの無記説とその展開
——龍樹の思想を中心として——　木村　光喜
栄西禅師の研究　小崎友未奈
琵琶法師の仏教　佐々木一光
一遍教学の特色について
——念仏観と神祇観を通して——

現代における看取りと仏教　坪内　祐未
仏と蓮華座　徳岡　珠門
——仏教に於ける蓮華表現が意味するもの——
臨済禅の研究　中安　黄瑛
近代日本仏教における肉食妻帯論の再考　西村　誠哉
東大寺修二会の研究　福田　育弘
パーリ文献「仏ディーパンカラ品」
(Dipaṃkara-Buddhavaṃsa) における波羅蜜
バンタオチャイ　プラマハバンジェット

## 優秀卒業論文題目（五十音順）

平成二十五年度

『マハーヴァストゥ』の研究
——「アヴァローキタ・スートラ」を中心として——　左藤　仁宏
『廻諍論』の研究　清水　仁

# 平成二十五年度　大学院修士論文題目一覧

ミャンマー仏伝図の研究
——「出家」の場面を中心として——　ティン　マー　ウー

中国唯識における如来蔵思想の研究
——『楞伽経』の受容を中心として——　李　子捷

維摩経変相図の研究
——隊列表現を中心として——　平　法子

スリランカ仏教における出家者と在家者の関係
——daham pāsal（法の学校）を通して——　横尾　明親

ガンダーラ仏教図像にみられる儀礼表現の研究　瀬本　彩萌

# 平成二十五年度　龍谷大學佛教學會彙報

平成二十五年四月十二日（金）
新入生入会説明会（深草学舎　二二号館〇〇二教室）
五月十四日（火）
龍谷仏教学会定期総会（大宮学舎　本館講堂）
十一月二十一日（木）
龍谷大學龍谷佛教學會　仏教学大会（大宮学舎　清和館三階ホール）
講師　渡邊隆生（龍谷大学名誉教授）
講題　「「仏教学」の特性と展望管見」
平成二十六年一月十六日（木）
龍谷大學佛教學會学術講演会（大宮学舎　清和館三階ホール）
講師　山田法胤（薬師寺管主・法相宗管長）
講題　「奈良仏教と八宗兼学」
一月二十九日（水）
龍谷大學佛教學會　学術研究発表会（大宮学舎　西黌二階大会議室）
発表者　山田昌弘（龍谷大学大学院特別専攻生）
題　目　ヒンドゥー教における裸者の形成について
——『ヴィシュヌ・プラーナ』第3巻第17-18章を中心に——
発表者　神山清高（龍谷大学大学院特別専攻生）
題　目　Dīgha-Nikāya 戒蘊篇と『長阿含経』第三分における三学について
——慧学を中心にして——
発表者　Vo Thi Van Anh（龍谷大学大学院博士課程）
題　目　瑜伽行唯識学派文献における波羅蜜多受容について
——十波羅蜜多の定数を中心に——
発表者　壬生泰紀（龍谷大学大学院博士課程）
題　目　ガンダーラ仏三尊像にみられる尊名
——『大阿弥陀経』所説の阿弥陀仏との関連について——
発表者　那須円照（龍谷大学仏教文化研究所客員研究員）
題　目　『アビダルマディーパ』の認識論
——眼見説の妥当性——

## 執筆者紹介（執筆順）

| | | |
|---|---|---|
| 石川知彦 | （いしかわ　ともひこ） | 龍谷ミュージアム教授　龍谷ミュージアム副館長 |
| 和田秀寿 | （わだ　ひでとし） | 龍谷ミュージアム学芸員 |
| 西谷　功 | （にしたに　いさお） | 泉涌寺宝物館学芸員 |
| 三谷真澄 | （みたに　まずみ） | 龍谷大学国際文化学部教授 |
| 福山泰子 | （ふくやま　やすこ） | 龍谷大学国際文化学部准教授 |
| 岡本健資 | （おかもと　けんすけ） | 龍谷大学政策学部講師 |
| 岩井俊平 | （いわい　しゅんぺい） | 龍谷ミュージアム講師 |
| 上枝いづみ | （うええだ　いづみ） | 龍谷大学文学研究科研究生 |

## 平成25年度　龍谷大學佛教學會役員

| | |
|---|---|
| 会長 | 淺田正博 |
| 理事 | 淺田正博　入澤崇　楠淳證　能仁正顕<br>藤丸要　道元徹心　吉田哲　若原雄昭 |
| 評議員 | 淺田正博　入澤崇　岡本健資　桂紹隆<br>楠淳證　能仁正顕　長谷川岳史　藤丸要<br>三谷真澄　道元徹心　吉田哲　若原雄昭（五十音順） |
| 総務 | 吉田哲　打本和音（D２）　西山明範（M１） |
| 会計 | 岸田悠里（D１）　安達大祐（M１） |
| 庶務 | バルア　シャントゥ（D１） |
| 書記 | 藤俊哉（M１） |
| 編集 | 三谷真澄　楠原光純（M１） |
| 監事 | 岡本健資　工生泰紀（D３）　目黒照典（L３） |

## 編集後記

本号は、2012年度をもって龍谷大学を定年退職された宮治昭教授の退職記念号として編集されたものである。

宮治先生の御業績は仏教美術史、ことにインド、ガンダーラから中央アジアの仏教美術の学術的解明にあり、斯界の研究の発展に貢献されたことにある。また2011年度に開館した「龍谷ミュージアム」の初代館長として、その設立段階から奔走され、開館記念展「釈尊と親鸞」はじめ、特別展「仏教の来た道―シルクロード探検の旅」など数々の特別展を手がけてこられた。

先生の温和なお人柄は、多くの人から慕われ、日本学術振興会科学研究費補助金の研究代表者として、若手研究者の育成や海外の研究者との交流を率先してこられた。

そこで本号では、その学恩に報いたいという趣旨から、宮治先生の学問分野と本学での活動に御縁のあった研究者の方々、特に龍谷ミュージアムの教員諸氏から原稿を募ることになり、深く御縁のあった研究者、その指導を直接間接に受けた研究者から原稿が寄せられた。本号では、関係各位計八編の論文を掲載することができた。

私事ながら、宮治先生と2010年7月に旅順博物館にご一緒させていただき、同博物館に蔵される大谷探検隊将来のガンダーラ仏教美術を見ながら、間近で先生の熱い思いのこもった解説に接し、仏教美術への深いご造詣に直接触れることができたことは私にとっての無上の幸せであった。

なお、前号より龍谷仏教学会の学術発表会の発表要旨を掲載することになったが、本号でもそれを継承した。

最後に、本号から龍谷仏教学会は、「龍谷大學佛教學會」として再出発することとなった。今後とも、当学会の研究活動に御理解、御協力をお願いいたします。

（三谷真澄 記）


平成26年3月10日発行　　佛教學研究　70号

編集者　龍谷大學佛教学會　〒600-8268 京都市下京区七条大宮 龍谷大学　仏教学合同研究室内

発行者　龍谷大學佛教学會　〒600-8268 京都市下京区七条大宮 龍谷大学　仏教学合同研究室内

*Bukkyo-Gakkai*, Buddhist Research Institute, Ryukoku University
Department of Buddhist Studies, Ryukoku University,
Shichijo Omiya, Shimogyo-ku, Kyoto 600-8268, JAPAN

頒布所　百華苑　京都市下京区油小路六条上 電話〈075〉371―5760番 振替01080―1―25788番

印刷所　図書印刷 同朋舎　京都市下京区中堂寺鍵田町

# 薬犍度記事の古層と新層
## ――飢饉の記事を中心に――

井　上　綾　瀬

薬犍度が現存する諸律文献（『パーリ律』、『四分律』、『弥沙塞部和醯五分律』、『摩訶僧祇律』、『十誦律』、『根本説一切有部毘奈耶薬事』）では、『摩訶僧祇律』を除く全ての薬犍度で、飢饉時に乞食が難しい場合の対策が語られる。

飢饉の説明から、記事の新古を考える場合、記事が無いことが一番古いという視点に立った。つまり、律の前提にある随犯随制に従うことにした。飢饉の記事にのみ視点を当てれば、摩訶律には飢饉の記事そのものがないことから、一番古形を保っていると考えた。そして、記事の多い五分律の飢饉の記事が、新型の記事であるとした。

飢饉時特例には、①比丘の調理と食料の保存、②果実を自ら拾い種を除く、③食前食後の食料の扱い方、④レンコンの許可、⑤飢饉時特例の再禁止、⑥五分律独自の規定というおおよそ六種類の記事がある。

①の記事は、パーリ律、四分律、五分律、有部律で飢饉時の特例として認められ、有部律に共通する点から、当時一般的な事例であったと推測し、飢饉の記事の中で古層に分類した。同様に②～⑥の記事も比較検討した。

その結果、飢饉に関する記事は、現状では、根本分裂後に上座部系の部派内で形成されたのではないかと考えられ、さらにその内容には、増広があったことが伺える。飢饉時特例は、古層に「①比丘の調理と食料の保存、⑤飢饉時特例の再禁止、③食前食後の食料の扱い方」、新層に「④レンコンの許

可、②果実を自ら拾い種を除く」があるのではないかと類推した。しかし、この新古決定の方法には、問題が残っている。各部派が各律文献を伝持したと伝えられるが、部派同士の交流があった可能性や、律文献の編纂により内容の変更が行われた可能性がある。また、摩訶律のみ唯一の大衆部系の広律であることを鑑みれば、摩訶律が他の律文献と合致しないことは当然である。

(龍谷大学大学院研究生)

# アビダルマの二諦説

西山　亮

『倶舎論』などに説かれる勝義と世俗の二諦説を取り上げ，関連する先行研究の問題点を指摘し，さらに，中観派の清弁がアビダルマの二諦説をどのように評価しているのかを検討した。

『倶舎論』第6章（賢聖品）第4偈に説かれる二諦説は，E. フラウワルナー氏などによって，世親が経量部的立場から主張したものとされた（*Die Philosophie des Buddhismus*, 1956）。しかし桂紹隆氏によってその二諦説が説一切有部の論書『雑阿毘曇心論』に見られることが指摘され，『倶舎論』の二諦説を経量部の説とみる必要はないことが論証された（"On *Abhidharmakośa* VI. 4"『インド学報』2，1976）。桂氏の見解は広く学界に認められてきたが，近年いくつかの論考がその説の再考を促すこととなった。

まず張富萍氏は，『雑阿毘曇心論』と『倶舎論』との相違点の一つとして勝義諦に注目し，認識と認識対象という観点から世親の勝義有／諦を捉え，『雑阿毘曇心論』との区別を試みた（「『倶舎論』「賢聖品」における二諦説について」『駒沢大学大学院仏教学研究会年報』28，1995）。しかし張氏の見解は世親自身の説から導き出されたものではなく，『倶舎論』の当該箇所の最後に記された古師（pūrvācārya）の説や，『倶舎論』注釈者・称友の解釈を根拠にしているという問題を抱えている。木村誠司氏もまた桂氏の説の再考を促す一人であり，二諦と四聖諦との関連において『雑阿毘曇心論』と『倶舎論』との差別化を試み，アビダルマの二諦説に関する多角的な研究を重ねている（「アビダルマの二諦説：序章」『駒澤大學佛教學部論集』42，2011；「アビダルマの二諦説：訳注研究・インド編Ⅰ」『同』43，2012）。し

かし，張氏と同様，桂氏の説を完全に否定しうるほどの根拠は提示されていないように思われる。

最後に，二諦をその教義の根本原理とする中観派の清弁が『般若灯論』第22章（如来品）において『倶舎論』の二諦説を引用し，吟味を加えていることを紹介し，「アビダルマの二諦説は概して法の実有性を論証するためのものである」というアビダルマの二諦説に関する中観派からの視座を提示した。

（龍谷大学大学院研究生・
龍谷大学アジア仏教文化研究センター・リサーチアシスタント）

# 瑜伽行唯識学派における二諦説解釈の変遷

早島　慧

二諦説は中観派の中心思想として知られ，一方瑜伽行唯識学派の中心思想としては三性説を挙げることができる．しかしながら，瑜伽行唯識学派の思想体系においても二諦説は重要な思想であり，初期中観派の二諦説とは異なる独自の二諦説解釈が確認される．本発表では，従来あまり注目されることのなかった，瑜伽行唯識学派の二諦説解釈について，変遷という観点から考察した．

先行研究において，中観派とは異なる瑜伽行唯識学派独自の二諦説解釈の特徴として，「仮説の所依」を認める点が指摘されている．つまり，世俗という言語表現がなされる際に，その仮説の原因たる所依を認める二諦説である．金才権氏は，「仮説の所依を『依他起性』と位置付けたことから，瑜伽行派の独自的な思想である『三性説』が形成されたと推測される」と述べ（『『中辺分別論』における三性説の研究』，龍谷大学博士論文，2008年．pp. 67-68，fn. 67.），瑜伽行唯識学派の中心思想である三性説形成の一要因として，瑜伽行唯識学派独自の二諦説，仮説の所依を認める二諦説を指摘する．

しかしながら，瑜伽行唯識学派独自の二諦説解釈として別の解釈が指摘できる．三性説成立以降の瑜伽行唯識学派の文献においては，三性説に基づき二諦説を解釈する用例が確認される．特に『中辺分別論』第三章「真実品」は，根本真実たる三性説に基づき二諦説を説明し，世俗・勝義をそれぞれ三種に分類する．このうち，勝義は円成実性のみによって示され，真如，涅槃，道の三種であるとされる．真如，涅槃のみならず，勝義を目的とする道もまた勝義であるという解釈は非常に特殊なものであり，これは安慧の注釈によ

って，円成実性解釈に起因するものであるとされる．このような二諦説解釈は，初期中観派の文献には確認されない瑜伽行唯識学派独自の解釈と考えられる．

従って，本発表では，瑜伽行唯識学派の二諦説解釈が

三性説形成と関連する二諦説→三性説成立→三性説に基づき解釈される二諦説

というように変遷すると考えられることを指摘した．

（龍谷大学大学院博士後期課程三回生）

# 『大乗荘厳経論』第 XI 章における幻の譬喩と三性説との関係性について

間　中　　充

瑜伽行唯識学派の論書『大乗荘厳経論（*Mahāyānasūtrālaṃkāra*：MSA）』第 XI 章述求品（Dharmaparyeṣṭy-adhikāra）のなかで，kk. 15～29では幻喩たること（māyopamatā）についての探求が説かれているが，偈の注釈である世親釈（*Mahāyānasūtrālaṃkāra-bhāṣya*：MSABh）と安慧釈（*Sūtrālaṃkāra-vṛttibhāṣya*：SAVBh）との間で，三性説を譬喩で説明している幻（māyā）あるいは幻事（māyākṛta）が指し示す意味内容に関して，いささか見解の相違が見られる。ここはすでに近年の先行研究でよく指摘されている箇所ではあるが，両注釈に違いが見られるのは偏に，māyā という言葉が表す意味内容の捉え方によると思われる。

そこで発表者は，主に kk. 15～16の MSABh において，幻の譬喩で表されていることとそれに対応する三性（特に依他起性と遍計所執性）に混乱が生じているという問題を解決するため，māyā と māyākṛta の関係性に注目しながら，三性説を幻で喩えられている方から検討した。その結果として，原文の分析に基づき以下の 3 点を報告して，三性説に固執せず，それぞれの偈の独立性を優先して解釈するという新しい読み方を提案した。

①k. 15本偈には māyā と māyākṛta が共に出てきているのに対して，k. 16では MSABh に māyākṛta だけが出てくるのみである。

②k. 15が māyā と māyākṛta の譬喩で依他起性と遍計所執性を表しているのに対して，

k. 16はあくまで勝義と世俗の二諦を主題としてその譬喩を述べているだけではないか。

③三性説では勝義＝円成実性だが，MSABh にも円成実（pariniṣpanna）という語はなく，ただ本偈の勝義（paramārtha）という語を使用しているに過ぎない。

つまり k. 15は依他起性と遍計所執性とが，k. 16は勝義と世俗の二諦がその偈の主題で，そこに幻の譬喩がなされているという認識が大切であり，k. 16の māyākṛta は単独で用いられている以上，単なる喩えなのである。そもそも MSA の幻（māyā）の譬喩には“幻想の原因”と“幻想そのもの”という 2 つの側面があり，幻（māyā）を原因としてその結果が幻事（māyākṛta）であるので，māyā は māyākṛta の意味を包括する概念であると言える。よって k. 15を引きずらないで māyā を māyākṛta の意味に置き換えて読むことができ，そうすると少なくとも依他起性の喩えは会通できるのである。

（龍谷大学大学院博士後期課程 1 回生）

# 『大乗荘厳経論』第 XX-XXI 章第57，59偈の考察

上　野　隆　平

『大乗荘厳経論』の XX-XXI. 43-59が説く「仏の功徳」(buddhaguṇa) は，対応関係にある『菩薩地』「建立品」が述べる「百四十不共仏法」を敷衍して組織されたものである。「百四十」とは，[1]〈三十二相八十随好〉を始めとする10の徳目の法数の総計である。ただし，『荘厳経論』は『菩薩地』が設定した「百四十」という枠組みを踏襲しないことにより，より多くの徳目を導入し，独自の仏徳論を形成するに到った。結果として，徳目の総数は20となり，その配列は「低（共）≫高（不共)」の次第をもって行われることとなった。新たに採用された徳目の中，(1)〈四無量〉から(8)〈六通〉までの共功徳は，仏と二乗の間に接点を設けることにより，不定種姓の声聞・菩薩を大乗に誘引・慰留する役割を果たすものであったと考えられる。

しかしまた，『荘厳経論』が「仏の功徳」を組織するにあたり，新たに追加した徳目は，これら以外にも２つあった。すなわち，XX-XXI. 57, 59が説く(18)〈十八不共功徳〉と(20)〈六波羅蜜の完成〉がそれである。「百四十」の中に典拠を持たないこれらの不共功徳を『荘厳経論』が新たに追加したのはなぜか。また，これらを追加することにより，同論の仏陀観にどのような性格が付与されるであろうか。本発表の目的は XX-XXI. 57, 59への考察を通して，これらの点を明らかにすることにある。

考察の結果，発表者は，『荘厳経論』は(18)(20)の徳目を導入することにより，自らの仏徳論に，より高度な不共性を加えるに到ったと結論づけた。すなわち，一方では，(1)～(8)の共功徳を導入することにより，声聞・独覚

との間に接点を見出しながら，他方では，これらの不共功徳を導入することにより，二乗との差異を強調し，仏の偉大性を高めることに成功したというわけである。『荘厳経論』が『菩薩地』に典拠をもたない徳目を新たに追加・導入した背景には，凡そ，このような意図が込められていたものと考えられる。

（龍谷大学大学院研究生）

# CONTENTS

Introduction to the Iconography of "Sambo-kojin"
..... Tomohiko ISHIKAWA ..... 1

A Study on an Aspect of Kozui OTANI's Expeditions: Mainly on the Achievement of Yoshinobu TATSUE who Investigated the South Sea Islands
..... Hidetoshi WADA ..... 37

The Significance of the Newly Discovered Text "*Nanzan Hokugi Kenmon Shiki*": Acceptance of Ritual and Dignity Brought from the Vinaya Sect Buddhism of the Southern Song Dynasty and Deployment of the *Sen'nyu-ji* School in the Kamakura Period
..... Isao NISHITANI ..... 73

Review of Yasuko KOMOTO: *Adoration for Lha sa — Bunkyo AWOKI and Tibet*
..... Mazumi MITANI ..... 109

A Story of Siddhārtha's Throwing the Elephant in Gandhāra: Focusing on the Relationship between Narrative Reliefs and Biographies of the Buddha
..... Izumi UEEDA ..... (103)

Squinches in the Bamiyan Region
..... Shumpei IWAI ..... (79)

The First Defeat of Heretics at Śrāvastī
..... Kensuke OKAMOTO ..... (55)

Aspects of the Small-scale Patronages in Ajanta Caves: Dedicatory Inscriptions and Mahāyāna Buddhism
..... Yasuko FUKUYAMA ..... (27)

On the Chinese Manuscripts of Early *Larger Sukhāvatīvyūha Sūtra* Collected by German Turfan Expeditions
..... Mazumi MITANI ..... (1)

# 龍谷大學佛教學會会則

## 第一章　総　則

第一条　本会は、龍谷大學佛教學會と称する。

第二条　本会は、仏教学の研鑽ならびに会員相互の親睦を図ることをもって目的とする。

第三条　本会は、事務所を京都市下京区七条大宮龍谷大学仏教学研究室内に置く。

## 第二章　会　員

第四条　本会は、次の会員をもって構成する。

一、名誉会員…本会に功績のあった人の中から、理事会がこれを推薦し、総会で承認する。

二、個人会員A（普通会員）…本会の主旨に賛同する研究者をもって会員とする。

三、個人会員B（学生会員）…龍谷大学文学部の仏教学専攻の学生をもって会員とする。

四、個人会員C（賛助会員）…本会の主旨に賛同して事業の援助を専らとする者および本会の発行する刊行物の入手を専らとする者をもって会員となす。

五、団体会員…仏教研究を主目的とする大学、短期大学およびそれに準ずる学校学術団体ならびに本会の主旨に賛同する団体をもって会員とする。

## 第三章　総　会

第五条　総会は、本会の最高議決機関である。

第六条　総会は、本会の個人会員をもって構成する。

第七条　総会は、個人会員の五分の一以上の参加をもって開催することができる。

第八条　総会は、次の場合に開催される。

一、定期総会（毎年五月）。

二、会長が必要と認めた場合。

三、会員の五分の一以上の連署による要求のあった場合。

第九条　総会における決議は出席会員の過半数の同意を必要とする。

## 第四章　役　員

第十条　本会は、次の役員を置く。

一、会長　一名…理事の中から互選し、本会を代表して会務を統理する。

二、理事　若干名…評議員の中から互選する。理事は理事会を組織し、会務を処理する。

三、評議員　若干名…会員の中から、総会において選出する。ただし、他の役員との兼任を妨げない。

四、編集員　若干名…会長が評議員の中から委嘱し、学会誌「仏教学研究」の査読、編集を行う。

五、委員　若干名…会長が会員の中から委嘱する。

委員は、次の業務を分担する。

一、総務。二、会計。三、編集。四、庶務。五、書記。

六、監事　三名…総会において会員の中から互選し、会務を監査する。

第十一条　評議員の任期は三年、他の役員の任期は一年とし、重任を妨げない。

## 第五章　事　業

第十二条　本会は、次の事業を行う。

一、総会。

二、学術大会。

三、研究会、輪読会および研究発表の開催など。

四、学会誌の発行。

五、会員の親睦に関わる事業。

六、その他、必要とする事業。

## 第六章　会　計

第十三条　本会の経費は、会費、寄附金、その他の収入による。

個人会費は、年額五、〇〇〇円とする。

団体会費は、年額一〇、〇〇〇円とする。

第十四条　本会の会計年度は、四月より翌年三月までとし、会計報告は定期総会において行う。

## 第七章　附　則

本会則は、総会の決議により変更することができる。

一、本会則は昭和四十五年十二月十日施行の龍谷大学仏教学会会則の一部を変更し、平成二年四月一日より施行する。

二、本会則は、平成二年四月一日施行の龍谷仏教学会会則の一部を変更し、平成六年四月一日より施行する。（第四章第十条・第四章第十一条・第五章第十二条・第六章第十三条の改正）

三、本会則は、平成六年四月一日施行の龍谷仏教学会会則の一部を変更し、平成二十五年五月十四日より施行する。（第一章第一条、第六章第十三条の改正）

1SSN 0287-0312

# THE STUDIES IN BUDDHISM

## *BUKKYOGAKU-KENKYU*

No. 70

Presented in Honour of
prof. Akira MIYAJI
on his retirement from
Ryukoku University

March, 2014

Buddhist Research Institute

*Bukkyo-Gakkai*

Ryukoku University, Kyoto, Japan.